

第2回 大和政権の時代

1. 大和政権の成立

4世紀の倭についての記載が中国史書にはないこともあって、大和政権がいつどのような形で成立したのかについてはわからない。少なくとも4世紀中頃には政権が成立したとされる。4世紀とは、考古学では古墳時代前期の頃であり、畿内には古墳が造られはじめた。政権が少なくともこの時期に成立したであろうことを証明するものとしては、①古墳が造られるようになったこと。これに関連して同じ鋳型で作った同範鏡が分布していること。つまり、同範鏡の分布は、政権と地方豪族との同盟関係が成立していたと考えられる。②この時期に日本の朝鮮進出が大規模に展開されていること。朝鮮の史料によると、日本は366年に百済と交渉し、399年には大軍を朝鮮に送った。この出兵については、奈良県石上神宮に所蔵されている七支刀に泰和4年=369年と記載されていることなどから確認されている。

◆ 倭と百済の連合を媒介に朝鮮への軍事的介入をすすめた理由は、

- ①武器・生産用具・威信財といった王の必需品が国内のみでは生産できなかった。
- ②より新しい技術と素材が必要だったこと。
- ③朝鮮内部の動向、つまり高句麗の南進で新羅がその支配下に入り、百済はこれと対立し、倭と連合したためであった。

2. 東アジアとの関係

大和政権の成立の頃、朝鮮では小国が成立しはじめ、馬韓50国、辰韓12国、弁韓12国があった。魏の支配に反発したこれらの小国は鎮圧されたが、その後中国王朝の衰退によって馬韓からは百済、辰韓からは新羅ができた。しかし、弁韓には統一国家が誕生しなかった。日本の朝鮮進出は、この頃のこと、百済と同盟関係を結んだ大和政権は、369年、新羅に進入し、伽耶（加羅）地方を支配下に置いた。この出兵の理由は、鉄資源の獲得と先進技術の導入である。

一方、朝鮮半島北部に勢力を持っていた高句麗は、391年=辛卯^{しんぼう}の年、大和政権と戦っている。このことは、中国吉林省集安県通溝、かつての高句麗の都があったとされる丸都^{がんと}にある好太王（広開土王）碑に刻まれた1759字から知ることができる。この好太王碑については、その内容が嘘だと朝鮮の研究者は考えているようである。

その後、大和政権は5世紀に入ると中国南朝に働きかけた。当時中国は、南北朝時代とよばれる時期であった。日本は江南の建業=南京に都があった南朝に使者を送っている。それは、413年から502年までの間で、『宋書倭国伝』の記録によって知られる。『宋書』

は沈約が完成した書物で、**讚・珍・済・興・武の倭の五王**のことが記されている。五人の王のうちはっきりと確認できるのは武＝雄略だけで、興が安康、済が允恭であろう。讚からはじめられた中国への働きかけは、済の時代になり、称号が与えられるようになった。特に武は、「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国諸軍事・安東大將軍・倭王」の称号を宋の順帝によって認められた、この称号のうち、武の称号から百済が抜けているのは、この時すでに百済は宋に朝貢し、別に称号を受けていたからである。

武については、大王の号がある金石文が存在する。**埼玉県稻荷山古墳出土の鉄剣**には（そういえばお土産で「鉄剣チョコレート」なるものが存在する。一度食べてみたいものだ。）**辛亥年＝471年**の年号が刻まれた文があり、「**獲加多支鹵大王**」に仕えていたことがわかる。また、熊本県江田船山古墳出土の太刀にも、「**獲加多支鹵大王**」に東西の豪族が仕えていたことが刻まれている。なお、鉄剣と太刀の違いは、考古学では、両刃のものを劍、片刃のものを刀と区別している。

◆倭は南宋から冊封（中国皇帝の臣下となること）を受けることで、国際秩序に組み込まれることとなったが、国際動向そのものに関心があったわけではなく、3・4世紀以来の鉄資源の獲得と先進技術の確保が関心の中心であった。また、南宋から冊封を受けることで、朝鮮半島への軍事的介入を正当化し、かつ日本列島内の毛人・衆夷を征服しようという従属型の帝国主義の構造を持った。

3. 氏姓制度

大和政権の政治組織を**氏姓制度**という。氏は多くの家からなる同族集団（本家＋分家、血縁＋非血縁）で、有力な家長を**氏上**として氏全体を統率し、氏神の祭りを司り、氏を代表して大和政権に参加する。氏上以下のメンバーを**氏人**という。

大和政権は、氏を政権に参加させ、それぞれの職務を世襲的に分担させている。この場合、身分は大王から与えられる姓により決められている。姓には、**臣・連・君・直・造・首**がある。臣は、大和政権に仕える中央・地方の有力豪族。連は特定の職務で政権に仕える豪族。君は地方の有力豪族である。臣・連グループのうち**大臣・大連**が国政の中心を担う。皇室（大王家）そのものも、元は磐余という名を持つ祖先がいた。また、大和政権の経済基盤は**屯倉**であり、田部という耕作者がいた。豪族も**田莊**という田を所有していた。

（ちなみに、大王家（今の天皇家）には苗字がない。今でも同じである。嘘！と思うなら、調べてみると良い。○○親王とかいう我々下々のもの、庶民は、○○という苗字と○○という名前を持っているが、皇族にはない。逆に皇族が一般の人と結婚したら、皇族ではなくなるから、苗字がつく。ほら、現在の天皇の娘さんはご結婚なされて、黒田さんになったじゃあないか。何故、天皇（皇族）には苗字がないのかといえば、苗字は与えるものであって、与える側の人には不要だからである。但し、こんなこと知っていても、絶対入試には出題されないけどね）。

4. 部民制

大和政権の社会組織を**部民制**という。まず、部とは皇室・豪族に仕えた集団のことである。この部に属する人々を部民という。中央で祭祀・軍事・手工業などの政権の職務を分担する有力集団は**伴造**とよばれ、品部という部に貢納や労役を負担させた。品部は、元は伴とよばれていたらしいが、政権の確立過程で品部に再編成されたものである。また、これとは別に**名代・子代**という直属民がいる。名代は、大王や皇子などの名をつけたもので、子代は皇子の養育のために設置された。名代の代表例としては、安康大王（天皇）に仕えた**孔王部**や安閑大王（天皇）の皇后春日山田皇女に仕えた**春日部**がいる。

品部は、伴造に率いられた職業名を持つ部民で、**錦織部・陶部・韓鍛冶部**などの手工業以外に、軍事と関係が深い**久米部・舍人部**などがある。さらに、豪族に従う部民を**部曲**という。豪族名を部の頭につけており、例えば蘇我氏の部曲は**蘇我部**という。部曲には部民と奴隸民としての奴婢がいた。

5. 渡来人

独自の文字を持たなかった日本人は、渡来人の協力で記録などを行った。6世紀中頃、渡来人の**王辰爾**が高句麗の国書を理解したといわれる。また、この頃、**史**とよばれる渡来人の集団が形成されていった。彼らは大和・河内に居住し、**東漢氏・西文氏**という氏を作り文書の読解・記録にあたった。東漢氏の祖先は、**阿知使主**といわれ、西文氏の祖先は**王仁**だといわれる。また、養蚕・織物などの技術を伝えた**秦氏**は山背の太秦に居住し、祖先は**弓月君**だとされる。これら渡来人のうち東漢氏は、私有民の**漢部**を従え、**今来漢人**という各種の渡来人たちを支配した。

漢字とは別に学問・仏教も伝来した。『日本書紀』によると、513年百済が、段楊爾が五経博士を送ってきたという。五経博士とは儒学の教師のことで、易経・書経・詩経・春秋・礼記を教える人で、段楊爾以外にも数回送られてきた。また、554年には易・医・暦博士が来日している。

6. 仏教公伝

仏教が公式に伝えられた年代は2つある。**538年=戊午説**をとる『上宮聖徳法王帝説』・『願興寺縁起』と**552年=壬申説**をとる『日本書紀』である。両方の年代とも百済の聖明王が欽明天皇の時に伝来したという点では同じであるが、年代に相違があり、通常誤りが多い『日本書紀』の年代を採用せず、538年説をとる。仏教公伝の際、受容派の蘇我氏と非受容派の物部氏・中臣氏が対立したことが知られる。この公伝とは別に、平安末期に成立した皇円の著作『扶桑略記』には、鞍作鳥の祖父、司馬達等が、552年に仏教を伝えたことと記され

ている。さらに、朝鮮出兵の際、各豪族は無事生還を祈るため、すでに仏教信仰をしていたとされている。

また、この頃、『帝記』・『旧辞』が作成された。帝記は皇室の系譜・皇居・山陵などについて記されたもので、旧辞は朝廷の説話・伝承がしるされたものだが、具体的にはよくわからない。

7. 古墳文化

以上見てきた大和政権の時代は、古墳時代に相当する。弥生時代の墳丘墓と古墳との相違は、①墳丘規模の相違、②地域的特色がなくなる、③副葬品が特定のものとの組合せとなるという3点があげられる。そもそも古墳とは、日本各地の王の連合のシンボルである。別の言い方をすれば、高塚式古墳（墳墓）をさし、階級の高い者の権力を示す表現物である。

古墳時代は、普通、前・中・後期の3期に分かれる。前期、それも出現期の古墳は、東日本では前方後方墳が多く、西日本では前方後円墳が多いという地域的な分布がある。前期古墳はさらに、畿内から瀬戸内海に分布し、司祭者的性格を持つ鏡・玉・剣などの副葬品が添えられた。中期古墳は、巨大な前方後円墳が造られるという特徴がある。副葬品は武器・馬具など軍事的性格を持つものが多い。前方後円墳の大きさについて触れておくと、例えば、大山（大仙陵）古墳は、墳丘の長さ 486m、3重の周濠があり、墓域 100haである。この巨大な古墳を造るには1日 2000人が動員されたとして、延べ 680万人の人員と15年8ヶ月の期間がかかったと計算されている。また、副葬品の武器のなかで、屈伸性のある甲の^{けいこう}拄甲がよく知られている。また、前期と中期の副葬品の違いから研究者によっては支配者が農耕民族から騎馬民族に変化したと考える人もあり、「騎馬民族王朝説」という論を展開する人もいるが、実際には良くわかっていない。

後期古墳は、従来の竪穴石室から横穴石室へと変化する。古墳自体も追葬可能な家族墳的性格を持ち、一箇所に古墳が集中する**群集墳**が多くなる。また、埋葬される者も大王ではなく、有力農民が多くなっていく。その理由として、鉄製農具の普及によって有力農民が台頭してきたことをあげることができる。そのため、副葬品も日常用具＝須恵器などが多くなる。

最後に古墳が次第に造営されなくなった理由を考えておこう。それは、大和政権の政治制度の整備や 646年に出された「大化の薄葬令」をあげることができる。また、仏教の伝来により火葬が広がったこともあるだろう。但し、白鳳期に造営されたという高松塚古墳のような例もあり、古墳がまったく造られなくなったというわけではない。

◆前方後円墳は、単なる葬儀の場であるばかりでなく、当時意識されていたか否かに関わらず、首長権の継承の場としての意味を持つ。さらに、前方後円墳が東北地方南部以西にまで広がったということは、畿内を中心とする首長との間に政治的連合ないし従属がなされたことと考えられる。

8. 古墳時代の生活

農業生産力の上昇により、この時代の生活は次第に向上していったと考えられる。しかし、庶民は依然として竪穴住居に住んでいた。但し、5世紀には窯がある竪穴住居になっていた。豪族は、周囲に環濠・柵列をめぐらした居館に住んでいた。

土器にも変化がみられる。土師器は、弥生土器の系譜を引く土器で、日常生活に用いられた。須恵器は、大陸の技術を受容して作られたものである。須恵器はロクロを使用し、窯を使って焼いたもので、祭祀などの特別な時に使用された。

衣類は、麻などの原料を用い、男は袷袷衣、女は貫頭衣を身に着けた。この当時の人々は民族宗教を生み出した。農耕儀礼としての祈年祭や新嘗祭、各地に自然崇拜を中心とする祭祀場が設けられた。例えば福岡県沖ノ島はその代表で「海の正倉院」とよばれている。その後、祭祀場は次第に固定し、社＝神社ができる。伊勢神宮は天照大神をまつる内宮と豊受大神をまつる内宮からなり、神明造という建築様式で作られた、出雲大社は、大国主命をまつる神社で大社造という建築様式で作られている。また、奈良県の大社神社は、本殿がなく、拝殿があるだけであり、三輪山が神体である。さらに、呪術的風習がある。禊^{みそぎ}や祓^{はらい}や鹿の骨を焼いて吉凶を占う太占^{ふとまに}や熱湯の中に手を入れさせ、手がただれるかどうかで真偽を判断する盟神探湯がある。

◆弥生時代との比較

- ①農具—鉄器の普及（石包丁→鉄鎌・鉄製農具の改良＝U字型の鍬・鋤）。
- ②カマドが中央から竪穴住居の壁面に造りつけられ、住居の中央は作業場・談話の場に。
- ③首長の居館が集落内から分離した。

9. 大和政権の動揺

6世紀に入り、大和政権は危機に瀕した。危機の第一は、朝鮮半島経営の行き詰まりである。北部の高句麗が南進をはじめ、新羅・百済を圧迫しはじめ、日本もその影響を受けることになる。百済は、512年に継体天皇に使者を送り、百済周辺の4県の割譲を要請してきた。継体朝の実力者であった大伴金村は、この要求を受け入れ4県を百済に割譲したが、後にこの時百済から賄賂を受け取ったとされ、540年に物部尾輿に批判され同年失脚する。

一方、新羅は次第に半島で勢力を増強し、半島内の日本の根拠地を脅かすようになった。これに対し、日本は近江臣毛野を中心とする軍を派遣しようとしたが、527年、新羅と結ん

だ筑紫国造磐井の反乱に阻まれてしまう。磐井は火・豊の国と結び1年間にわたる反乱を続けた。政権は、物部^{もののべ}麁鹿^{あらか}火^かを送り、ようやく乱の鎮圧に成功した。なお、磐井の墓は福岡県八女市にある岩戸山古墳だと考えられている。その後も新羅の力は弱まることなく、ついに562年、日本の半島経営の拠点である加羅（伽耶）を失うこととなった。

第二の危機は、政権内部の問題である。大王の継承をめぐり豪族同士の対立が激化した。506年、武烈天皇が死去し、大王の継承者がいなくなった。そこで大伴金村が北陸から大王家の遠縁にあたる継体天皇を迎え、金村の勢力が増大した。しかし、金村は、任那4県割譲問題で失脚する。継体天皇の死後、『日本書紀』には、安閑→宣化→欽明と皇位が継承されたように記されているが、その内容には矛盾が多く、安閑・宣化朝と欽明朝が両立していたと考えられている。

両政権の対立を経て欽明が朝廷を統一すると、欽明天皇を擁立した蘇我氏が台頭してきた。蘇我氏は三蔵（大和政権の蔵で、斎蔵・内蔵・大蔵のこと）を管理する豪族で、大臣の地位にあった。蘇我稲目は、2人の娘を欽明天皇に嫁がせ勢力を誇っていた。蘇我氏と共に勢力を誇っていた物部氏は、仏教公伝の際の論争で対立を深めた。欽明の死後、皇位は敏達→用明へと継承された。用明の時期に蘇我・物部の対立が激化する。用明の後継者に敏達の子、押坂彦人大兄皇子が決まったが、これを不満とした欽明の子、穴穂部皇子が物部守屋と結び反対した。そこで、稲目の後を継ぎ大臣となった蘇我馬子は、穴穂部皇子を殺させ、物部守屋を打倒した。587年、用明が亡くなり、欽明の子、泊瀬部皇子が崇峻天皇として即位した。しかし、崇峻は馬子に殺害された穴穂部皇子の弟であり、馬子を恨んでいた。そこで、馬子は^{やまとのあたえこま}東漢直駒を使って崇峻を殺害させ、馬子の姉の子である推古天皇を豊浦宮で即位させた。

◆支配体制の動揺

この当時の国内の支配体制の動揺は、以下のような形でもみることができる。

- ①大和・上野・尾張などの特定地域を除くと、全長100mを超えるような大型の前方後円墳の築造に終止符が打たれた。
- ②副葬品では、鉄製武器が減少すると共に、金銅製の装身具を中心とするきらびやかなものになっていった。
- ③地方支配の再編強化は、屯倉制の拡大を基準に行われた。つまり、屯倉＝倉＋御田であり、立地は交通の要所に設けられ、政治的・軍事的機能と同時にその経営に基づいた貢納品をも徴収する収奪機能を兼ね備えていた。